第２回　あ　い　う　え　お　か　き　く　け　こ　さ　し　す

「台北日本語授業校／広がるネットワーク」（執筆者：及川朋子/代表）

前回は台北日本語授業校の設立の経緯と現況をご紹介しました。今回は学校運営を通じて広がった人と人とのつながり、グループとグループのつながりについてお伝えいたします。

一、外部からの支援

当校は日本人妻のグループが中心となって設立された学校です。初期は「学校」というよりは「寺子屋」の様相を呈していました。「教室が足りない」、「どうやって教えて良いか分からない」、「未登録の塾として摘発されるのではないか」といった問題に直面しながらも、解決手段が見つからずにいました。しかしながら、どんな時も一生懸命努力し続けていれば「救いの手」というものが現れるものです。

１．台北日本人学校

2002 年にある会合で当校の活動についてご紹介したところ、当時の台北日本人学校の校長先生がそれを聞いていらして、台北日本人学校に派遣されている教員の配偶者数名が不定期にお手伝いしてくださることとなりました。日本で教員経験がある方々でしたので、多くの事を学ぶことができました。宿題の添削を一つとっても、素人の私達は正解率が低ければ「がんばりましょう」と書いていましたが、先生方は半分しか正解していなくても赤ペンで「よくできました！」と大きな花丸をかいてくださったのです。義務教育ではない日本語補習授業校では生徒の学習意欲を高めることがいかに大切かを学ばせていただきました。さらに 2003 年 9 月から日本人学校の現役教員によるボランティア活動が正式に始まりました。日本人学校の先生による授業は国語にとどまらず、時には先生のご厚意により算数（数学）、理科、歴史、体育などの授業をしていただくこともあり、とくに日本で体験入学の機会を得ることができない生徒たちにとっては貴重な体験となっています。

また 2006 年 9 月から台北日本人学校の教室借用が始まり、４回に約３回の割合で台北市内の私立高校で、1 回は日本人学校で授業をしています。

さらには台北日本人学校での授業参観の機会もいただき、プロの授業から多くのヒントをいただいています。

当校への支援は代々の校長先生がご帰任する際に後任者へ申し送ってくださっているとのことで、現在も続いています。また当校への理解が深く長年連絡窓口となってくださっている先生がいらっしゃり、いつも当校を温かく見守ってくださっています。早い時期から台北日本人学校からのご支援をいただけたことは、当校にとってとても幸運なことであったといえます。

２．台湾日本人会

二十年前ぐらいまでは、台湾の日本人社会において駐在者と永住者との交流が少なく、私には台湾日本人会は駐在員のためのものという思い込みがありました。しかし 2004 年 2 月同会の会報誌『さんご』（第 449 号）に私の投稿記事（タイトルは「日本と台湾の架け橋を育てたい」）が掲載され、その記事をご覧になった当時の日台交流部会長から「有意義な活動なので、何か困っていることがあれば支援します」とのお電話をいただいたのです。これが台湾日本人会とのご縁の始まりとなりました。日台交流部会が当校の活動を支援してくださるようになって、事態は急展開していきました。上で述べた台北日本人学校の教室がお借りできるようになったのも、その一つです。日台交流部会の方々は、日本台湾交流協会に当校が日本政

府の援助対象校に申請できるかどうか調べていただけるよう仲介してくださいましたし、現地政府より「未登録の塾」とみなされるか法律顧問に問い合わせてくださいました。また日本人学校の教室を使えるように部会の活動の一環（但し自主運営体制は維持）として認めてくださった上、活動資金をご提供くださっています。

また当校の運営委員長に日台交流部会委員の席を設けてくださり、当校と日台交流部会の距離は大いに縮まりました。

設立から10年経った2011年に初めて政府の援助対象校に申請した際もたいへんお世話になりました。政府の援助対象校の申請要件の一つに「在留邦人社会の総意として、すでに設立されていること」がありますので、台湾日本人会にも申請にご協力していただく必要がありましたが、快くご協力いただきました。

台湾日本人会のご支援なくして、現在の台北日本語授業校は考えられません。

3．日本台湾交流協会

日本台湾交流協会台北事務所にも大きなご支援をいただいています。設立当初から日本語専門家の皆様にアドバイスをいただいたり、文化ホールを会議のために無料でお借りしたりしてきました。

とくに政府の援助対象校申請にあたっては、当時の総務部長や領事室長が親身になって手続きをしてくださいました。申請前には日本政府の緊縮財政の中で、新規の認定はないだろうという情報がありました。また、世界各地の補習校の援助額がどんどん削減されているとも聞いていました。そこに2011年3月の大震災です。そんな中で申請していいものか迷いましたが、「まずは申請すること、援助の必要性を知ってもらうことが大切」という関係者の皆様のアドバイスと励ましをいただき、2011年春に1回目の申請を行いました。「認定まで10年はかかるつもりで」といわれていたにもかかわらず、2回目の申請で認定を受けることができました。

認定以降は、教室賃借料の援助申請や当校の危機管理評価を手配してくださっています。おかげさまで今まで気づかなかった安全上の問題点にも気づくことができました。認定によって、脆弱だった学校運営の屋台骨が強化でき、これは持続的運営を支える大きな柱となりました。

4．ロータリークラブ

台北には日本語を公用語とするロータリークラブが2つあります。台北東海ロータリークラブと台北南山ロータリークラブです。いずれも当校の活動の意義を高く評価してくださり、資金的、物質的な援助をしてくださっています。

ロータリークラブは奉仕の精神を以て社会貢献を目指す団体です。とくに上記2クラブは日本と台湾との交流にも力をいれていらっしゃいますので、将来当校の卒業生が社会人となった後に2クラブに参加して日台交流の一端を担ってくれればよいなと個人的に思っています。

5．個人サポーター

私の友人である友子・マラハン氏は当校に長期にわたって毎年2万元を寄付してくださっています（今年は3万元でした）。かつて台北に住んでいた経験があり、最近は米国に住んでいらっしゃいますが、「クリスマスプレゼント」として当校に寄付の小切手が届きます。いただいた寄付は図書の充実やマイクやスピーカーのような機材の購入に充てさせていただいています。

二、台湾内で広がるネットワーク／「台湾継承日本語ネットワーク」の誕生

私は2001年（学校創立）から2007年にかけて運営委員長を務めましたが、子どもの卒業とともに現役保護者に運営委員長を引き継いでもらい、代表に就任しました。それまで多忙のためできなかったけれど、運営委員長を辞めたら是非とも

やってみたいことがありました。それは台湾各地の継承日本語クラスを訪問することでした。

初代副運営委員長として当校の運営を支えてくださった大成権真弓さんは「居留問題を考える会」の会長として、台湾各地で定期的に座談会を開いていらっしゃいました。そこで子どもの日本語教育に関する相談をよく受けること、既に台北と同様の活動をしている都市が幾つかあることを大成権さんからうかがい、二人で継承日本語クラスを巡回訪問することにしました。桃園、新竹、台中、高雄でそれぞれがんばっていらっしゃる「同志」を訪ね、クラスを参観したあとに運営や授業の進め方に関する課題について意見を交換しました。

そしてついに 2011 年 6 月台北日本語授業校で「台湾継承日本語ネットワーク」の発足会議を開催しました。台北、桃園、新竹、台中、嘉義、台南、高雄の継承日本語クラスと居留問題を考える会の関係者数十名が集まり、協賛してくださった台湾日本人会幹部の立ち会いのもと、発足を宣言しました。

三、「台湾継承日本語ネットワーク」の現況

2012 年 6 月の第 2 回年次会議では、台湾日本人会（協賛）関係者に加えて、日本台湾交流協会台北事務所から総務部長、日本語専門家、台北日本人学校教頭、台中日本人学校校長、高雄日本人学校校長を来賓にお招きし、各日本語クラスからの活動報告を行い、さらにはそれぞれが抱える問題について討論を行いました。形態や規模が異なっても多くの共通する問題があることに気づいたり、いままで思いつかなかった解決方法を他校ではすでに見つけて実践していたり、多くの情報を交換する有意義な会議となりました。

またこの会議において、当校の運営委員長経験があり、台湾大学日本語学科で教鞭をとり、さらに日本の母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会に所属する服部美貴さんが代表に、私は事務長にそれぞれ就任して、現在に至っています。

現時点で参加している日本語クラスは、台北日本語授業校、桃園日本語クラス、新竹日本語補習授業校、台中日本語クラス、台南こくごクラブ、にほんごスイッチ、寺子屋高雄の 7 校です。詳細は当ネットワークのホームページ（https://sites.google.com/site/twjhlnetwork/）をご覧ください。毎年春に一堂に会する年次会議を開催しているほか、数校で集まって意見交換会や勉強会を行ったり、合同授業を行ったりしており、ネットワーク内での交流は年々広がっています。

第三回は台北日本語授業校の服部美貴アドバイザー（台湾継承日本語ネットワーク代表）にバトンタッチし、「世界から見た台北日本語授業校～MHB 研究会での交流を通じて」をお伝えいたします。